令和4年度　環境で地域を元気にする
地域循環共生圏づくりプラットフォーム事業

成果共有会　発表資料

活動団体の本事業への関わり

今年度より“環境整備”に取組む	✔
昨年度から引き続き“環境整備”に取組む	

活動団体名：株式会社 山都竹琉

活動地域　：熊本県　山都町

活動におけるテーマ

『永代不朽のまちづくり：チリも積もれば山都なる！』

活動団体および活動地域の紹介

㈱山都竹琉について

竹資源活用を永年推進

熊本日日新聞

（第3種郵便物認可）

〝厄介者〟モウソウダケ 土壌改良剤、飼料に

竹粉に変え 農家手助け

山都町で利活用実験

山都町矢部地区の農家有志が山都町竹資源利活用協議会（藤本完一会長）をつくり、モウソウダケの資源化に取り組んでいる。専用の機械で土壌改良剤やサトイモなどの栽培農家に計3トンを引き取ってもらった。

飼料に使う微細な竹粉を製造し、実証実験を進めている。

同町は近年、竹林の増加で周囲の樹木の生育が遅れたり、有害獣の隠れ家になったりするなど影響が懸念されている。

水田や畑にまいても良い、1年間かけて収量や耐病性といった農作物への影響を調べる。畜産分野の供給先も探している。

調査結果を踏まえ商品化を進める予定で、協議会は町の補助を受けて同町島木のへき地保育所跡を改修、東京のNPO法人が開発した竹粉の製造機を導入した。2～5月に町農家を募り、しっかりとしたデータを集めたいと話している。

竹粉砕機

竹エキスドローン散布

山都町について

- 九州のど真ん中の中山間準高冷地、総面積の7割が山林・原野、田・畑2割。
- 人口1万4千人、過疎化が進む農業と林業が基幹産業の典型的な中山間地域。
- 40年以上にわたり有機農業に取り組む地域、有機農業№.1（有機JAS事業者数）
- 棚田百選2カ所選定

基幹産業は農林業

「有機農業を核とした持続可能なまちづくり」

山都町が令和3年度のSDGs未来都市に選定

今後、地域を維持するためには基幹産業である第一次産業の維持、発展が必須

地域循環共生圏を実現することで目指す地域の姿

②地域課題 情報発信

②地域課題 人口減少（地域コミュニティの崩壊）

②地域課題 CO2排出

②地域課題 地域産業の空洞化

多様なステークホルダー：住民・企業・事業者・金融機関・有識者・教育機関など

③地域資源 自然

山、滝、水、星空、蛍 サギ草、アユ

④事業 グリーンツーリズム

都市農村交流滞在観光 森林ランバイク アウトドア アドベンチャーツーリズム

旅行・観光業者

⑤成果 山都の魅力発信

③地域資源 人財

大学生・高校生

空き家・廃校

④事業 移住体験

御岳地区

SDGsの授業（出前を含む）、夏季研修

⑤成果 SDGsの普及啓発

③地域資源 竹林

④事業 山都町オリジナル堆肥

有機農家

鶏糞

竹エキス、竹粉

④事業 バイオガス発電事業

バイオガスを使った電源供給

⑤成果 エネルギー循環

③地域資源 有機農業

有機農業のまちとしての歴史

④事業 養蜂

矢部高校生

④事業 ベンチャー創出

コントラクター

域内事業者

⑤成果 サステナブルな農林業

③地域資源 棚田

棚田100選

エネルギープロダクト

④事業 見回りロボ

実証

IT技術

⑤成果 鳥獣害対策

⑤成果 モデル地区化

コンパクトシティ化

①ありたい未来 魅力が人を集める地域

①ありたい未来 竹資源を活用する地域

①ありたい未来 スマート有機農業による高付加価値型農業の地域

地域循環共生圏を活用して目指す地域の姿

自然、文化資本を「経済資本」へ転換する永代不朽のまち

地域のありたい未来実現のための これまでの歩み

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
事業全体の予定			全国キックオフミーティング					九州ブロック中間共有会				全国成果共有会
実施したこと			役場との打合せ		大学生向けSDGs研修	ステークホルダーミーティング	マンダラ素案作成 宮崎視察		コンポストワークショップ	ステークホルダーミーティング	マンダラ更新	

学生向け、町民向け有機農業・SDGs普及活動

【活動内容】

●大学生向け有機農業体験研修

SDGs未来都市に選定された有機農業に取り組むまちとして、
熊本県内の大学生に向けて、SDGsに取り組むスマート農業の現場を学ぶ研修を実施。

●町民向け生ごみコンポストWS

12月14日と18日に開催、町内130戸に配布、基材に竹チップ利用。

参加者の有機農業やSDGsに対する関心が高く、竹資源の利活用、地域資源の循環の学びの実践につながっている。

大学生向け有機農業体験研修（除草ロボット実演）

町民向け生ごみコンポストWS

地域のありたい未来実現のための これまでの歩み

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
事業全体の予定			全国キックオフミーティング					九州ブロック中間共有会				全国成果共有会
実施したこと			役場との打合せ		大学生向けSDGs研修	ステークホルダーミーティング	マンダラ素案作成 宮崎視察		コンポストワークショップ	ステークホルダーミーティング	マンダラ更新	

ステークホルダーミーティング

【活動内容】

- １回目　2022年９月８日　参加者：28名
- ２回目　2023年１月27日　参加者：41名

活動報告、事例発表、ワークショップ、情報交換

【参加者】

山都町役場、県立大学教授、大学生、町内高校生、有機農業者、IT企業、金融機関、シンクタンクなど

１回目（高校生の発表）

２回目（マンダラのブラッシュアップ）

・役場、大学教授、高校生、地域事業者が取り組みの事例発表を行うことで、ステークホルダー同士の活動に対する関心が高まった。

・各ステークホルダーの取り組みや想いを共有し、事業のタネやマンダラなど成果物作成のもととなる意見を集約。

地域のありたい未来実現のための これまでの歩み

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
事業全体の予定			全国キックオフミーティング					九州ブロック中間共有会				全国成果共有会
実施したこと			役場との打合せ		大学生向けSDGs研修	ステークホルダーミーティング	マンダラ素案作成 宮崎視察		コンポストワークショップ	ステークホルダーミーティング	マンダラ更新	

地域資源活用法の探索

【活動内容】

●宮崎県先進企業視察

宮崎県内の３社を訪問し、木質バイオマス資源、竹製家具、バイオガスプラントの視察実施。

●農林業連携

竹資源の多目的利用、資源化の取り組み竹チップの2次破砕に挑戦。

・木材の破砕や竹の活用方法、家畜の糞尿処理コストをバイオガス発電で改善するなどの取り組みを学ぶことができた。

・視察での学びを活かして、粒度に応じた利用方法、竹酵素風呂、竹飼料、竹堆肥等、多目的利用を検討。

宮崎県先進企業視察（㈱コーポレーションクリエイト）

農林業連携（竹チップの2次破砕）

現状の地域プラットフォームと取組を通じての変化

【現状の地域プラットフォーム】

- 地元の有機農業者及び農業者が主体のまちおこし会社を中心とした、大学、高校などを含めた幅広い年代で構成。
- それぞれが地域でSDGsやまちおこしのために活動
- SDGsや有機農業に関する町民向けワークショップや県内大学生向けの研修を実施。
- 役場と連携したイベントの企画・開催。

【地域プラットフォームの変化】

- これまでもステークホルダー間の交流はあったが、コミュニティが近いもの同士でつながることが多かった。今年度の活動を通して、山都町内の別業種との話し合いや行政や教育機関、金融機関とのつながりを得ることができた。
- 地域のありたい未来を考えるワークショップによって、採択時には想定していなかった事業のタネのアイデアや、新しいステークホルダーとのつながりが生まれた。
- 来年度の活動に向けて、地域一体となって活動するという意識が芽生えた。

取組を通しての成果と新たに見えてきた課題

取組を通しての成果

●SH間の調整をし、地域のありたい姿を議論する場をデザインできた。
　共通認識を持つ⇒知る、話す、共感へ⇒仲間が増える可能性増

山都町役場

●プラットフォームに必要なSHを特定し、声をかけることができた。
活動事例の報告を踏まえて、顔見知りになることで、取り組みの幅が少しづつ広がり始めている。

●本事業の個別相談ではなく、SHMの場づくりを通して、行政によるSDG s 取組みの説明の機会を設定できたことで、合意形成の機運が高まり始めている。今後、行政による本事業との協働、普及啓発を含む広報支援を仰ぎ、活動を通して、認知度向上につなげていく。

●金融機関への取組みの説明を行うことで地域振興事業としての位置づけ（事業の継続・持続性を念頭においたビジネス側面の強化）

取組を通しての成果と新たに見えてきた課題

新たに見えてきた課題

●情報発信の仕組み・方法

SHMに大学生や高校生を巻き込んだことで、思いを持った仲間が増え始めているため、SNS等を通じて情報発信をしていく。

●地域を持続させるための人材の確保と、その人材に知恵や技術を伝える場

温故知新を念頭に、地元の文化や歴史を再考し、見せ方を変えながら、足元を見直し、口伝・継承できる場づくり（SHM・交流会）が必要不可欠だと再認識した。

●SHがより気軽にそして活発に交流できるよう連携体制

気の合う仲間、SHごとの報連相ができるグループ活動を促し、集まる機会やSHMのような定期報告会を増やしながら、グループワーク、部会のような単位ごとに活動ができるように連携体制を構築していく。

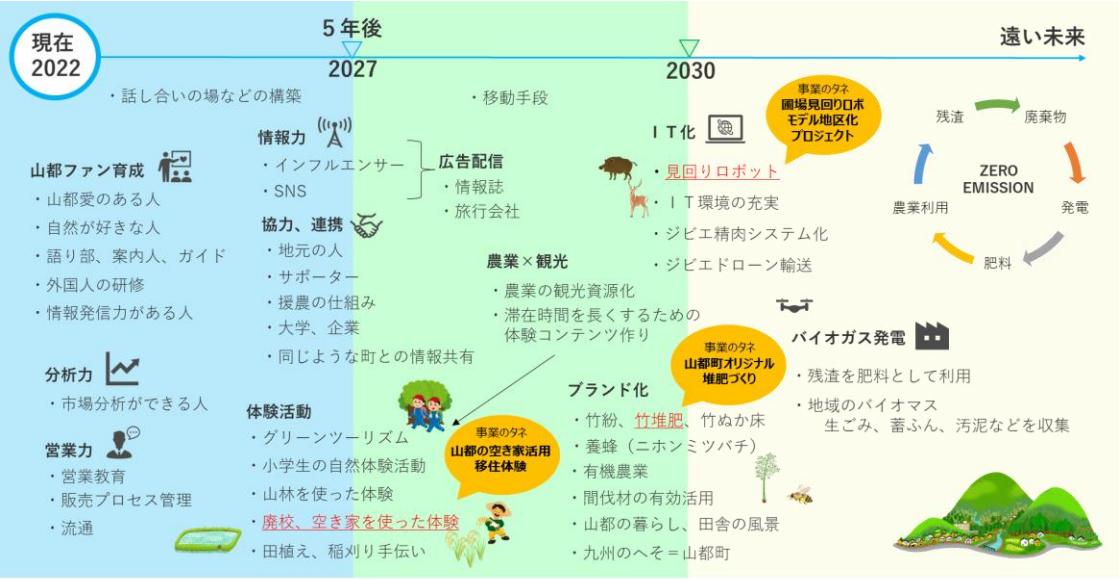
活動における今後の展望

●事務局体制の強化

地域コーディネーターとして、SHがより気軽にそして活発に交流できるように、事務局支援体制を強化していきたい。個々の活動をサポートし、進捗状況の確認とSH間の小さな連携を意識しながら、こまめな声掛け、マッチングや場づくりを推進する。

●事業のタネのブラッシュアップ

SHが話し合った今年度の地域のビジョンと「事業のタネ」を、事業の実現に向けてより具体的にしていく。



ステークホルダーミーティングをもとに描いたプラットフォームのビジョン

●事業主体の発掘

「事業のタネ」の事業を実現するため自分ごと化して率先して活動できる事業主体を発掘し、事務局として活動を応援する。